

『第一規律の書』の理念と特質

川 脇 慎 也

I はじめに

18世紀以降、スコットランドにおいて政治・経済・文化など、非常に広範囲にわたって、改革運動が推し進められた¹。この運動は16世紀以降の「スコットランド・ルネッサンス」の延長線上にあり、ときに「スコットランド啓蒙」とのかかわりで重視され、近代市民社会や資本主義の胎動として注目されてきた。本論文においては、その端緒として当地における16世紀の宗教改革に注目する。

「スコットランド啓蒙の父」と呼ばれるフランシス・ハチスン（Francis Hutcheson, 1694-1746）がスコットランド教会（the Church of Scotland）の穏健派牧師であったことを思い起こすならば、当地における改革運動と教会とは、無関係であるはずがない。また、18世紀における改革運動を経て、スコットランドが経済的に大きく飛躍を遂げたという事実は、資本主義の夜明けを告げるものでもある。

したがって、本論考は、スコットランドにおける宗教改革と資本主義との関連性に関わるものである。経済史において、このテーマは、マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」（*Die protestantische*

¹ 18世紀初頭以降、経済社会の改良を目的とする多数の団体がスコットランドにおいて設立された。そのモデルとなった団体が、農業知識改良協会（[Honourable]Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture, 1723-45?）である（川原2008, 131）。

Ethik und der Geist des Kapitalismus) 以来、主要な研究対象であり続けている。ウェーバーによる試みは、資本主義の起源と、その歴史的な形成過程を、人間の思考習慣にまで遡って究明しようとしたものとして理解できる。

しかし、プロテスタンティズムが普及した歴史的経緯は、ここで改めて言うまでもなく、純粹に宗教的な問題ではなかった。宗教改革は、一方でローマ・カトリックとプロテスタントによる宗教をめぐる対立であり、他方で、国家と教会による統治をめぐる対立でもあったからである。それ故、宗教改革と資本主義とをめぐる問題は、「資本主義の起源と国民国家の起源という、現在の研究における2つの重要な分野を結びつける問題」であり、「その成果は両者に関わる我々の理解と密接に」関わっているのである (Dickson 1980, 20)。

宗教革命の比較的早い段階において、カルヴィニストによる教会が姿を現したスコットランドの歴史は、プロテスタンティズムと資本主義の精神との関連性をめぐる、いわゆるウェーバー・テーゼの検証にうってつけであった² (Marshall 1980, 3/訳17)。ウェーバー・テーゼは、近代資本主義において特有な行為規範の起源をめぐる命題であり、それ故に、大きな論争を巻き起こしてきた。従来の研究は、「経済的利潤の追求と資本の蓄積」という資本主義社会の成立と発展の要諦はいかにして進展したのか、という点について多様な解釈を提供してくれる。とはいえ、政治・経済・文化などの非常に広範囲にわたって、知識人を中心にスコットランドにおいて展開された改革運動について、宗教改革に端を発する思考習慣の変化にその根源を見出そうとした場合、重要な点は、むしろ改革に鑄込まれた教育を重視する思考や態度であるように思われる。

それらの濫觴を探求するための手がかりとして、『第一規律の書』(*The First Book of Discipline*) と『スコットランド信条』(*the Scottish Confession*)³とを挙げることができる。両書は、1560年に「国王の大会議」(The Great Council

² Campbell (1967, 50) 及び Smout (1969, 491/訳553)。

³ 本稿において『第一規律の書』については Cameron (1972) を用いた。引用する際には、*Discipline* と表記する。

of the Realm) から「宗教改革に関する判断」を求められたジョン・ノックスらによって著されたものである⁴。当時、「国王の大会議」はスコットランドの支配権を掌握していた。したがって、両書はスコットランドにおける世俗の権力からの要請に基づいて、宗教改革を推し進めていた説教者たちによって作成されたというわけである。

とはいえ、『第一規律の書』と『スコットランド信条』とが歩んだ道は対照的なものであった。『スコットランド信条』は議会上に上程され、承認された。この書物は「信仰告白」(the confession of faith)であり、それが議会によって認可されたということは、「スコットランド国民のための信仰告白として承認」されたことを意味する(Brown 1891, 4-9/訳21-5)。それに対して、『第一規律の書』は裁可どころか、議会上に上程すらされなかった。なぜならば、同書には、当時の世俗権力を実質的に握っていた貴族やレルドにとって、受け入れ難い内容が含まれていたからである。それは、教会行財政に関する明確な改革方針である。当時の貴族やレルドは、高位聖職者と結びつき、教会財産を私物化することで利益を享受していた。示された改革が現実のものとなれば、彼らの利益は、大きく毀損されることになる。

時の権力者たちにとって不都合な改革案を含む『第一規律の書』が反発を招くこと、そして、それによって世俗の権力と教会との対立や、長老派(Presbyterian)と司教派(Episcopalian)との対立が激化することは、火を見るよりも明らかであった。後に詳述するように、このような事態を、ノックスらは明らかに予見していた。そうだとすれば、一体どのような意図の下、『第一規律の書』は作成されたのであろうか。

従来の研究では、この点に関して教区教会や牧師の経済的な境遇改善と、その財源の確保が強調されてきた⁵。『第一規律の書』には、教会は「教会の地代

⁴ 1560年4月29日付、エディンバラで認められた要請に基づく(Disipline, 85/訳209)。ジョン・ノックス(John Knox)、ジョン・ウイラック(John Willock)、ジョン・ウィンラム(John Winram)、ジョン・スポティズウッド(John Spottiswood)、ジョン・ロー(John Row)、ジョン・ダグラス(John Douglas)らが作成にあたった。

収入と教会財産」を用いて牧師や貧民を養う義務がある、と表明されており（*Discipline*, 156/訳241；160/訳243）、先行研究によって提示されてきた解釈に疑問の余地はない、と言えよう。教会財産をめぐる腐敗を根本から断ち切り、教会財政を健全化するとともに、立て直す。このことが、『第一規律の書』をまとめた説教者たちにとって、主要な関心事であったことは明白である。しかし、それは、あくまでも教会行政を滞りなく、かつ十全に実施するために外ならない。この点に焦点を絞るならば、同時に、教会は学校を支える責任がある、という記述を軽視することはできない。この規定は、教会行財政と教育とは関連付けて理解されており、同様に重要な問題であったことを示唆するものだからである。

スコットランドにおける教育制度の整備と宗教改革との関わりについては、これまでも注目されてきた。しかし、その焦点は、宗教改革によって示された理念と、スコットランドにおいて宗教革命後に確立した教育制度との関連性にあった⁵。なぜ宗教改革において教育が重視されたのか、そして、それは教会行財政改革といかに関連していたのか、という点については必ずしも明らかでない。

したがって、本稿の課題は、以下になる。すなわち、『第一規律の書』においてノックスらは、一体いかなることを意図していたのかという点について、教会行財政改革と教育理念との関連に注目しつつ、彫琢すること、これである。

II 教育と公共の利益

『第一規律の書』においては、複数の項にわたって教育制度の設計が描き出されている。そのうちの一つである「学校について」の冒頭において、まず教

⁵ Donaldson (1960, 12-14；1965, 132-53)、Kirk (1989, 168-173)、飯島 (1993, 362-64)、富田 (1995, 35-7)、北 (2003, 63) を参照願いたい。

⁶ 角替 (1974, 20)、松下 (2000, 28)

会行政に携わる「敬虔な行政官の職務および義務」が表明されている。それは、二つある。一つは「一切の迷信を追放し、暴政さと束縛から教会を自由にする」ことであり、もう一つは「次の世代に、どのようにしたら教会が純粋さを保ちうるかを、その力のすべてを尽くして整える」ことである (*Discipline*, 129/訳231)。これらを額面通りに受け取るならば、カトリックにおいて実践されてきた聖書に含まれない教義や偶像崇拝を廃し、ローマ教皇を頂点とするローマ・カトリック教会からスコットランドにおける教会を解放すること、そして、それによって取り戻される信仰の純粋さ、教会の純粋さを保つために必要なものを整えること、この二つを意味するように思われる。前者については、『第一規律の書』第一項「教義について」、第二項「聖礼典について」、及び第三項「偶像崇拝の廃止に関して」において示された内容と一致する (*Discipline*, 87-95/訳210-4)。したがって、「学校について」の主題は、二つ目の「敬虔な行政官の職務および義務」に関するものである、ということになる。換言すれば、それは信仰の純粋さと教会の純粋さとを保つために、何をどのように整えるのか、ということである。

上記の冒頭の直後、「学校の必要性」と銘打たれた記述が続く。「敬虔な行政官の職務および義務」の直後に「学校の必要性」が配置される構成は、いかに教育制度が重要視されているのかを示している。そこでまず述べられるのは、人間観についてである。「人間は生まれつき神ならびに一切の敬虔さについては無知」であるから、「この王国の若者を徳高く教育し経験に育むことに、大いに注意を払うのは当然」であり、若者が「知識と学識」を備えられるように教育すべきだし、そのような環境を整えるべきである、というのである (*Discipline*, 129/訳231)。これは、教育なくして信仰はありえないという表明に他ならない。したがって、ノックスらが教育制度をなぜ重視したのか、その理由は、この人間観にあるといってよい。

具体的に教育は、都市の実情に合わせて実施されるべきである、とされる。名が知れ渡っているような都市では、「おのおのの教会が少なくとも文法とラ

テン語を教えることのできる教師を1名任命する」べきであるし、「教義を学ぶために人々が僅かに週一回参集するような所」であっても、「教会に任命された通読者か牧師」が「教理問答所について子供たちや若者を教える配慮をしなければならない」、ともされている (*Discipline*, 130/訳231-2)。ここで規定される教育は、「文法」「ラテン語」「教義」についてのみである。「文法」および「ラテン語」は、聖書を読むために必須の能力であり、「教義」についての知識は、聖書の内容を理解するために欠かせない。すなわち、このような項目が、人々の教化のために設定されたことは疑いない。だが、「文法」および「ラテン語」は、ラテン語の構文および口語のラテン語を意味している、と思われる。これらは、聖書を読むために必須の能力であるだけでなく、あらゆる学問に用いられる言語能力であった (*Discipline*, 130, notes. 7)。

さらにくわえて、「おのおのの著名都市、特に監督の都市では、カレッジを設立」すること、「そこではアーツ、少なくとも論理学と修辞学を外国語ともども能力のある教師が教授」すること、彼らに対して「十分な給与を定めること」とされている (*Discipline*, 131/訳232)。ここでいうカレッジとは、アーツ・カレッジつまりスコラ・パブリカ (*Schola publica*) であり、「15歳（または16歳）から20歳（または21歳）まで」を対象とした「医学、法学、神学のいずれかの高等学部で学ぶ前の中間的な教育プログラム」を提供する教育機関である (*Discipline*, 131, notes. 13)。また教師に対して給与を保証するという規定は、教会行財政改革の方針と一致しており、「必要な給与と費用について」において、別途詳細に規定されている⁷ (*Discipline*, 150-1/訳238)。この規定

⁷ 以下は大学 (*Universities*) の必要な金額として集計されたものであるが、カレッジの学長に対する規定もあることから、教師の給与もまた下記に準じるように思われる。

第一に、弁証法の専門講師、数学者、自然学者、道徳哲学者の通常給与としては、それぞれ一〇〇ポンドで十分である。

条項 医学と法律の専門講師にはそれぞれ一三三ポンド六シリング八ペンス。

条項 ヘブライ語、ギリシア語、神学の専門講師にはそれぞれ二〇〇ポンド。

条項 カレッジの学長にはそれぞれ二〇〇ポンド。

は、第五項「牧師の生活費に関して、また正当に教会に所属している地代収入と財産の分配について」において、引用されているパウロの言葉に基づくものである、と考えられる。

われわれの主とその使徒パウロから「働いた人がその報いを得るのは当然である」、および「穀物をこなしている牛に、くつこをかけてはならない」⁸と言われているので、牧師に対して恥ずかしくない生活費が備えられることは必要であり、彼らが孤独にも陥らず、また傲慢と放縦にも陥らないような牧師となることを我々は求めている。(Discipline, 108/訳221)

くわえて、第6項「教会の地代収入と教会財産について」においては、「二種類の人々、すなわち牧師と貧民とは、……教会の責任で支えられなければならない」し、「聖職者の恩恵に属している利得者などという、いわば怠惰な空腹

条項 執事にはそれぞれ一六ポンド。

条項 庭師、料理人、門番にはそれぞれ一〇マーク。

条項 神学のクラスをとらない奨学生の一団に二〇ポンド。

条項 セント・アンドルーズにある僅か一二名の神学のクラスでは二四ポンド。

セント・アンドルーズ大学の年間の経常費の総額は三九七六ポンド。

グラスゴウの年間の経常費の総額は二九二二ポンド。

アバディーンは同額。

全体の経常費の総額（九六四〇ポンド）。

条項 職員の給与は、それぞれ新入生および〔その他の〕学生から二シリング〔づつ徴収する〕。哲学の修了生について、それぞれ三シリング。医学または法律の修了生について、それぞれ四シリング。神学の場合五シリング。奨学生はすべて除外。

条項 建造物の建物と維持のためには、寄付金をつるのが良いと思う。伯爵の子息は大学への入学に際し、四〇シリング、同じく終了に際し四〇シリングを差し出すこと。

条項 同じく卿の子息はそのような場合三〇シリング。自由保有のバロンの子息は二〇シリング。フューアーと富裕なジェントルマンの子息は一マーク。

条項 富裕な農民と市民の息子は、その際一〇シリング。

条項 それ以外の場合（奨学生を除く）、その際に五シリング。

(以上 Discipline, 150-2/訳238-9)

⁸ ルカによる福音書第十章七節およびテモテへの第一の手紙五章十八節。Cf. Discipline, 108, notes. 1/訳283 註(1)。

の徒が」せしめてきた費用で、教会は「み言の仕え人、貧民、若者たちの教師を養う義務がある」とも表明されている。

教師に対して給与を保証するという規定は、労働に対する正当な対価を支払うという方針を超えて、教育の充実に資することになる。正当な報酬は、能力のある教師の確保を容易にするであろうし、またそれによって、高い教育水準を保ち、さらなる学問の発展にもつながりうる。学問の発展は、さらに優秀な人材を引き寄せることにもなるであろう。しかし、このような好循環を生み出すためには、教育を受ける機会の平等が条件になる。そこに格差が存在する場合、逆に社会の不安定性は高まることになる。教育機会の不平等は、人々の職業選択を限定することにつながり、さらにはそれが所得格差へと連鎖する。このことによって、富者と貧者、権力を持つ者と持たざる者という社会格差はいつそう拡大するとともに、それは固定化されることになるからである。

『第一規律の書』における「貧しいがために独力では勉学が無理で、また友人らもその支えになりえない人々、特に地方から来る人々の扶助がなされなければならない」という規定は、貧民救済だけでなく、人々の教育の機会を広く確保するものである。家柄や生まれた場所に関わらず、教育の門戸を広げるとは、優秀な人材を確保する確率を高めることにもなる。このことから『第一規律の書』において規定された教育制度は、教化という目的に留まるものではなく、人的資本の形成と蓄積に寄与することは明らかである⁹。

このような構想が、宗教革命の時点で提起されたことは、スコットランド啓蒙だけでなく、当地における工業化との関連でも注目に値する。経済史において、工業化の主要な原因に関する分析は、アダム・スミスの『国富論』に遡ることができる。スミスは資本形成と市場の拡大の重要性を強調したと理解されているけれども、彼は同時に人的資本論者でもあったからである。

⁹ 「自立的成長への離陸」という概念を提唱したロストウは有効投資と貯蓄の割合を強調した (Rostow 1959, 7)。Cf. Campbell 1967, 39.

Ⅲ 『第一規律の書』の承認をめぐる

『第一規律の書』においてまとめられた内容は、「教義、聖礼典の執行、牧師の選出、その維持のための生活費支給、教会規律、教会行政」に関するものであり、「この王国内〔スコットランドのこと〕で遵守されるべき共同規定の信仰統一のための」諸項目であることが明記されている(*Discipline*, 85/訳209;〔〕は引用者によるもの)。

「国王の大会議」から「宗教改革に関する判断」を求められて、この書物が作成されたことは既述のとおりである。その判断とは、より具体的にはノックスらの「要望」であること、そして、それは「否認」される可能性を孕んでいることが、序言において示唆されている。

貴下らは、キリスト・イエスに与ることを待ち望んでいるゆえに、神の明らかなみ言が承認しないであろうことを認めず、また貴下らが公正、正義、および神のみ言が特に記す定めを拒否しないであろうことを謹んで要望する。……貴下らが快樂や人間への好情のために、記され揭示された神のみ言によって、貴下らが誤りであると証することができないような事柄を、否認することのないよう、謹んで貴下らに願う次第である。(*Discipline*, 86/訳209-10)

ノックスらが懸念した通り、『第一規律の書』は、そのままのかたちでは議会に認められなかった。しかし、このような結果になることを、「6人のジョン」が見通せなかったはずはない。なぜなら、『第一規律の書』の結論において、「一見したところでは、われわれの請願のあるものは、貴下らにとって奇妙に思えるであろうことは疑い得ない」と表明されただけなく、次のようにも述べられているからである。

教会が怠惰な口腹の徒を養うことを強制されたり、また、これまで暴力によって維持されて来ている暴政を支えたりすることのないよう、教会を自由な状態に置くようにと要望すると、多数の人々を怒らせるであろうことをわれわれは知っている……（*Discipline*, 208/訳269）

この引用文に示されているように、説教者たちがまとめた判断や、そのなかに含まれる要望は、「多数の人々を怒らせる」ことが明確に認識されている。「多数の人々」とは、具体的に誰を意味しているのでしょうか。まず、これまで教会によって養われてきた「怠惰な口腹の徒」（idle bellies）、次に教会が支持してきた暴政を敷いた統治者たち、そして、要望の提出先である「国王の大会議」の構成メンバーらが考えられる。では、「奇妙に思われる請願」とは、いかなることを示唆しているのでしょうか。

想定される「多数の人々」には、教会財産によって私腹を肥やしていた、という共通点がある。教区収入の大部分は、1560年までに、修道院、司教座聖堂参事会、共住聖職者参事会付属教会、大学などによって盗用されていたし、その結果として、各教区の教会は十分な宗教活動の資金を確保することができず、司祭は生活すらままならないような状態にあった¹⁰。このような歴史的背景に鑑みるならば、教会財政の健全化と、その立て直しとが、「奇妙に思われる請願」として意図されていることは明らかである。しかし、そうだとした場合、

¹⁰ 教区収入の盗用は、スコットランドにあった教区中、ほぼ90%に当たる教区で横行していた。またスコットランドの有力な家系は、空席となった聖職禄を保有するコメンデイトル（Commendator）となり、聖職禄を二重取りしていた。さらに、それに留まらず、世襲され聖職禄は、「世襲的な財産」とみなされていた（Donaldson 1965, 135-6/訳143-4）。当時の教会の惨状について、『第一規律の書』には、次のように記されている。

人々が公に集まるべき教会と集会場所は、それにふさわしくないために、神の言と聖礼典の執行が軽侮されることのないように、迅速に、扉、窓、屋根の修理がなされ、神の尊厳にふさわしいと同時に、人々に安らぎと便利さを与えるよう、内部を整えることが必要である。（*Discipline*, 202/訳265）

受け入れられない要求を表明する理由にはならない。この点に関しては、上記の引用文に続く箇所が重要である。

……しかしそれについて、われわれが沈黙を守れば、「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」という言葉で、使途の口を通して明らかにしたもうた、正しくて正義でありたもう神を怒らすことはまことに確実である。(Discipline, 208/訳269)

「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」という一文は、教会財産を私物化してきた貴族やレルドなど、有力な家系に対する強烈な批判である。くわえて重要なことに、ノックスらは自身の主張が「神の求めたまわぬことを何も要望していないならば、貴下らは神の命令に抗していることに留意されよ」と続けて、念を押してもいる。さらに続く文章では、改革を否定すれば天罰が下ると述べ、一瞥の限りでは「脅し」ともとれる論調ですらある。

キリスト・イエスの情熱とその栄光が貴下らを動かして、その抑圧された教会を自由にしようとするよりも、愚かな感情のゆえに、これまで暴君的にキリスト・イエスの信徒の上に君臨して来ている、貴下らのこれらの肉の友人らを支えようと貴下らが関心を払うならば、われわれは、貴下らに対する厳しい突然の処罰を恐れるものであり、また〔教会を自由にしようとする〕この計画実行の栄光と名誉とは別の人々に取って代わられることになる。(Discipline, 209/訳269-70)

ここまでの引用文から明らかのように、ノックスらの主張の論理立ては、沈黙すれば神を怒らせることになり、改革を表明することこそ神の意志であるというものである。したがって、教会財政改革に対する貴族やレルドの反対を見越していたノックスらにとって、改革が実を結ぶか否かよりも、表明すること

それ自体が目的だったということになる。つまり、ノックスを始めとする起草者たちは、自らの要望が通らないことを自認したうえで、教会財産をめぐる腐敗とその原因とを、『第一規律の書』によって明確に批判したわけである。このように整理して間違いないとすれば、『第一規律の書』は、実践的というよりもむしろ理念的な側面を強調したものである、と言えよう。しかし、そうだとすれば、地区教会と牧師の窮状を訴えるに留まらず、さらに教育の重要性を説き、具体的な制度設計を含む青図を描く必要性は、どこにあったのであろうか。

ノックスらによる既得権益への挑戦状は、1561年1月の「コンヴェンション」での議論を経て、以下に引用する「枢密院法」(Act of Secret Counsell)によって条件を付された形で承認されるに至った。

本証書に、今署名し、上述のごとくはじめからこの書に特記されている条項について助言をしてきたわれわれは、①これをよしと思ひ、あらゆる点で神のみ言にかなひ、ここにつけ加えられた注と追補とにかなひと考える。②われわれは、われわれの力を尽くして、これらの条項を推進することを約束する。その条件としては、③司教、修道院長、小修道院長、その他の高位聖職者、ならびに、これまでにわれわれのところに参加してきている受禄聖職者 (benificed men) が、存命中、その聖職禄の収入を享受すること、そして、④彼らは、ここに特記されているように、み言の説教と聖礼典の執行のために、ミニストリと牧師とを支え維持すること。

(*Discipline*, 210/訳271；下線及び丸囲み数字は引用者によるもの)

見られるように、下線部①～③は全て貴族とレルドの既得権益を守るためのものである。「枢密院法」によって、『第一規律の書』で示された既得権益への挑戦状は、その全てではないにしろ、有名無実化されてしまったように思われる。しかしながら、④については教会側に対する明らかな譲歩である。見方を変え

れば、ノックスらは、『第一規律の書』において今後の改革を詳らかにすることで譲歩を引き出した、ということになる。

IV おわりに

上記で確認したように、『第一規律の書』はそのままの形で認められる可能性は低い、このようにノックスらが考えていたことは疑い無い。すなわち、そこで提起された改革案は、実践的というよりも、むしろ理念的な側面が強調されているといえる。しかしながら、それを単なる青写真と判断することもできない。改革の全体像、特に世俗的権力の中心にいた貴族やレルドに対して、教会行財政に関して利害が対立することを明確に示したことによって、ノックスらは彼らから譲歩を引き出すことに成功しているからである。これを単に結果論として片づけることは、短絡的であると言わざるを得ない。

新しい教会秩序を打ち立てるためには、福音を担う聖職者だけでなく、教義を十全に理解できる聞き手、すなわち信者を育てなければならない。その意味で、教育と貧民救済は、何よりも優先される事項である。そのための場として、教区教会は不可欠であり、そこで人々を教育できる牧師や教師が求められたのである。その財源を確保するための方策として、教会行財政に関する諸改革が提案されたわけであるが、この改革が一筋縄ではいかないことは、ノックスらにとっては共通認識であった。これは世俗的権力と教会との対立であるだけでなく、教会内部における司教派と長老派との対立とが複雑に絡み合った問題であり、いずれにしろ、その解決に時間を要することは想像に難くない。そうだとすれば、ノックスらは、諸改革が成るまでの間、教会財産に代わる経済基盤を求めなければならない、ということになる。すなわち、貴族やレルドの既得権益を一時的に受け入れざるをえないことになるのであれば、彼らから代替策を引き出すとともに協力を取り付けること、これが『第一規律の書』を著したノックスらの現実的な意図として浮かび上がってくる。このように把握して間違い

ないとすれば、『第一規律の書』は、その「序言」に示されているような、彼らの判断や考えを単に綴ったものではなく、教会行財政改革を実現するための戦略的な交渉の書であった、と理解すべきものである。

参考文献

- Brown, Thomas. 1891. *Church and State in Scotland: A Narrative of the Struggle for Independence from 1560 to 1843*, MacNiven & Wallace, Edingburgh, 1981. 松谷好明訳『スコットランドにおける教会と国家』すぐ書房, 1985年.
- Cameron, James K. 1972. *The First Book of Discipline*. the Saint Andrew Press. 飯島啓二訳「規律の書（1560／61年）」出村彰・丸山忠孝・飯島啓二訳『宗教改革著作集 第十巻』教文館, 1993年：203-72, 281-90.
- Campbell, R. H. 1967. The Industrial Revolution: A Revision Article. *The Scottish Historical Review*, Vol. 46.
- Dickson, T. 1980. *Scottish Capitalism, Class, State and Nation from before the Union to the Present*, Lawrence and Wishart. 1980.
- Donaldson, Gordon. 1960. *The Scottish Reformation*. Cambridge University Press.
- . 1965. *The Edinburgh History of Scotland Vol.III Scotland: James V - James VII*. Oliver & Boyd. 飯島啓二訳『スコットランド絶対王政の展開 十六・七世紀スコットランド政治社会史』未来社, 1972年.
- Kirk, James. 1989. *Patterns of Reform — continuity and change in the reformation kirk* —, T&T Clark.
- Marshall, G. 1980. *Presbyteries and Profits, Calvinism an the Development of Capitalism in the Scotland, 1560-1707*. Clarendon Press. 大西春樹訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神——スコットランドにおけるウェーバー・テーゼの検証』すぐ書房, 1996年.
- Rostow, W. W. 1959. The Stages of Economic Growth. *The Economic History Review*, New Series 12(1): 37-55.
- Smout, T. C. 1969. *A History of Scottish People: 1630-1830*. Charles Scribner's Sons. 木村正俊訳『スコットランド国民の歴史』原書房, 2010年.
- 飯島啓二. 1993. 「ジョン・ノックス『規律の書』（一五六〇／六一年）」『宗教改革著作集 第十巻』（出村彰・丸山忠孝・飯島啓二訳）教文館：361-87.
- 角替弘志. 1974. 「スコットランド教育史」梅根悟監訳『世界教育史体系 8 イギリス

- ス教育史 II』講談社, 1974 : 209-65.
- 川原和子. 2008. 「スコットランド啓蒙期の主要学・協会、クラブについて―付・関連刊本及び MSS. リスト―」川原さんを追悼する会編『女性司書の足あと―回想の川原和子―』79-140.
- 北政巳. 2003. 『スコットランド・ルネッサンスと大英帝国の繁栄』藤原書店.
- 富田理恵. 1995. 「スコットランド宗教改革と2つの「規律の書」」『歴史学研究』(歴史学研究会編) 668 : 32-47, 64.
- 松下みゆき. 2000. 「近代スコットランドの教育制度に関する一考察―19世紀における教区学校制度の変容―」『人間文化学研究集録』(大阪府立大学大学院人間文化学研究科・総合科学研究科) 9 : 28-40.

The Contemplative Characteristics and the Practical System Design in *the First Book of Discipline*

Shinya Kawawaki

The First Book of Discipline was unlikely to be accepted in its original form. There is no doubt that Knox and the others were aware of this. Nonetheless, the fact that the book was written and submitted would seem reasonable to emphasize the contemplative rather than practical side. On the other hand, the system depicted in the book is very practical. These contrasts illuminate the existence of certain intentions of the authors. That is to extract concessions from the nobles and laird. If we are correct in grasping it in this way, *the First Book of Discipline* is not simply a book of the Reformation leader's judgments and thoughts, but a book of strategic negotiations to achieve the administrative and financial reform of the church in Scotland.